



第六章 未来へ

大噴火が私たちに教えてくれたもの

新燃岳噴火は、私たちに大きな教訓と財産を与えました。

噴石や噴煙、空振など経験したことのない噴火への対策。キャンセルが相次ぎ観光客が激減。施設の存続さえ危ぶまれた観光業の過去最大の危機でした。

そんな試練に立ち向かい、少しずつ元気な霧島を取り戻せたのは、自分にできること、地域にできること、行政にできることなどを連携して、このまちが一つになって取り組めたからです。

そしてもう一つ。義援金や物資、励ましの手紙、支援ライブなど全国から届いた、

たくさんの応援が私たちに元気づけ、前に進もうという勇気を与えてくれました。

約300年ぶりの大噴火は、人と人とのつながり合うことの大切さと、霧島山は生きているということ私たちに教えてくれました。

2012年7月、それまで入山禁止だった登山道が1年半ぶりに一部開放され、韓国岳や高千穂峰などの登山ができるようになりました。連日、県内外から多くの登山客が訪れ、1年半ぶりの霧島山の「再会」を満喫しました。

特に韓国岳の山頂からは新燃岳の火

口を見ることができ、火山の迫力を間近で感じることができるようになり、多くの人がその姿を目に焼き付けようと連日にぎわいました。

日本ジオパークに認定されている霧島山にとって、生きた火山を間近で見られる楽しさは、まさにジオパークの醍醐味。また一つ新たな魅力が加わりました。

火山とともに生きていくためには、火山を知ることが大切です。豊かさや恵みだけではなく、地球活動のダイナミックさと驚異をしっかりと学ぶことが大切であることを、大噴火は教えてくれました。



えびのエコミュージアムセンターに展示してある約70cmの火山弾



韓国岳山頂でジオパークについて学ぶ中学生 [2012.9.28]



1年半ぶりに登山道が開放され、韓国岳山頂は登山客でいっぱい [2012.7.15]

新燃岳噴火を新たな霧島山の魅力と捉え その魅力を世界に向け情報発信しよう!



霧島市長
前田終止

平成22年、^{てい}口蹄疫や鳥インフルエンザ、さらに豪雨災害が追い打ちをかけ、多くのイベントが中止。霧島市の観光は大打撃を受けました。「負けてなるものか」という気概で「いざ霧島100万人キャンペーン」などの緊急経済対策を続けざまに実行し、NHK大河ドラマ龍馬伝の霧島ロケの実現、県を挙げての新幹線全線開業への努力など準備万端で新年を迎えました。そして平成23年1月26日、新燃岳の歴史的な大噴火。まさかに備え「環霧

島会議」で作成していた霧島火山防災マップを基に、国や県、関係機関と連携しながら防災対策を講じました。噴火当初、連日、全国にその模様が報道され観光客が激減。その後、3.11東日本大震災が発生。私たちは新燃岳の防災対策を講じながら、東日本大震災の被災地支援も積極的に実施いたしました。

平成24年7月、韓国岳・大浪池・高千穂峰など登山道の一部が開放され、観光業界の皆さまのさまざまな努力も相まって

客足が戻ってまいりました。ご支援いただきました皆さまに感謝を申し上げます。今年は世界ジオパークの認定に向けて挑戦し、平成26年3月に霧島はわが国最初の国立公園指定から80周年を迎えます。今後も防災対策や情報発信に努めながら、噴火により新たな魅力が加わった霧島山の素晴らしさを世界に情報発信してまいります。この記録誌が、これからも火山と共に生き続ける未来の霧島人への贈り物になれば幸いです。

韓国岳の山頂から新燃岳の火口を眺める登山客 [2012.7.25]